

## 人と動物の共通感染症

「人と動物の共通感染症」の中で、特に知っておいて欲しい物をピックアップしてあります。正しい知識を持っていただき、動物とよりよい関係を気づいて頂きたいと思います。動物が怖い存在と思わないで下さい(逆に、人から動物に移している感染症もかなりあるんですよ)。過度な溺愛は避け、正しい知識を持って飼育していけば何の問題もないことを理解して下さい。

### 「パストツレラ症」

パストツレラ(Pasteurella)属菌により引き起こさせる感染症です。聞き慣れない名前だと思いますが、実は犬の口腔内に75%、猫の爪に25%、猫の口腔内においてはほぼ100%常在している菌なのです。動物が症状を出すことは希ですが、人における感染症はよく見られているようです。人が犬や猫にかまれた場合、あるいは猫に引っかけられた場合の皮膚化膿症の原因菌は、ほとんどこの菌です。激しい痛みを伴い、腫れてきた場合はこの感染症を疑ってみて下さい。特に、高齢者の方、持病(糖尿病、肝疾患など)を持ってみえる方は要注意です。ただし、抗生物質に対する反応が非常に良いので、早期に適切な治療を受けられれば心配ありません。

皆さんに知っておいていただきたいのは、「パストツレラ症」は皮膚化膿症より呼吸器系の感染の方が多いのです。この場合の感染経路は、動物とのキス、口移しで食べ物を与える、一緒に寝るなどです。ドキッとされた方いらっしゃいませんか?でも、私は健康だから大丈夫……。本当にそうでしょうか。感染症というのは自己免疫と大きく関係します。前述したように高齢の方、持病を持ってみえる方は当然要注意ですが、普段健康な方でも風邪をひいた時、疲労が激しいときなどは感染する可能性は十分にあります。鼻炎や気管支炎がなかなか治まらない場合は疑ってみてもいいかもしれません。もう一つ、感染源として鶏肉がありますので、良く火を通して食べて下さい。

### 「トキソプラズマ症」

孢子虫類に属する原虫の一種 *Toxoplasma gondii* の感染により生じる感染症です。感染ルートは 猫科動物の糞便虫に排出されるオーシスト(卵のようなものです)の経口摂取、感染豚の筋肉中に含まれるシスト(オーシストが経口的に感染し、体内で発育し、その動物の筋肉内に形成した囊のこと)の経口摂取が主なものです。要するに、「トキソプラズマ症」は猫の糞あるいは豚肉から感染するのです。オーシストの排泄期間は初感染時の1~3週間のため、猫の本原虫抗体陽性率は高率にもかかわらず、糞便検査でオーシストが検出されるのは1%以下なのです。ですから、実際は、猫からの感染はまずないということです。妊娠すると「猫を捨てなさい」というお医者さんがいるそうですが、あまりご存じないの shouldn't でしょうね。猫を飼われている方が妊娠された場合は、猫の糞便検査をして下さい。これにより検出されなければ心配ありません。もしくは、妊娠された方がすでに原虫抗体陽性の場合(過去に感染があるということです。血液検査で分かります)は、糞便中からオーシストが検出されても感染しませんので安心して下さい。問題になるのは、妊娠初期にトキソプラズマに初感染した場合のみです。

トキソプラズマの感染経路の多くは豚肉です。日本や米国では、成人の 20 ~ 25 % が感染し、30 歳未満では 12 % 程度、30 歳以上では 20 % 以上と年齢が高くなるほど感染率が高くなります。これは、加熱不十分の豚肉が原因と考えられています。生肉や加熱不十分な肉を好むフランス人の陽性率は 85 % という統計があります。しかし、豚肉に含まれるシストも 66 以上で死滅しますから、十分に加熱すれば心配ありません。ちなみに 66 は赤い肉汁が出ない程度の加熱です。注意点はもう一つ、豚肉を切った包丁とまな板です。シストが付着した包丁やまな板で、野菜を切ってサラダとして食べるとします。この場合、生きているシストを摂取してしまうことになるわけです。ですから、豚肉の調理は最後にするか、加熱殺菌をまめに行うかを心掛けて下さい。ただ、国産の豚肉からトキソプラズマが検出されるのは畜産業界の努力のおかげで 5 % 以下になっていますので、さほど心配ありません。しかし、外国産については注意が必要と思われる。

感染した場合の症状は、2 種類に分けられます。先天性トキソプラズマ症：妊娠初期に胎児が感染した場合のものです。早産・流産を起こしたり、胎児の水頭症や精神・運動障害などが生じます。後天性トキソプラズマ症：ほとんどが無症状で、発病するのは希ですが、AIDS 等の免疫異常がある場合に発症することがあります。ちなみに猫は無症状です。

正しい知識を持って頂ければ怖くない感染症ですから、妊娠したと同時に猫を処分するなんていうナンセンスな事はやめてください。

#### 「Q 熱」

コクシシエラ・ブルネッティというリケッチアが原因の感染症です。この原因菌は犬猫や野生動物(野鳥も含めて)が持っている、人が感染する場合は、病原体を含む塵埃の吸引によって感染する場合が最も多く、ついで乳肉製品などによる経口感染と考えられますが、感染経路が不明な場合が多いのが現状です。

Q 熱の症状は、発熱、頭痛、筋肉痛、全身倦怠感、呼吸器症状などで、インフルエンザ様であったり、肺炎、肝炎、あるいはその他の症状であったりと、その臨床像は多彩であるために、診断されにくい病気です。ちなみに、Q 熱という病名は、「Query fever = 不明熱」に由来しています。最近では「慢性疲労症候群」の原因とも考えられています。

風邪のような症状が長引く場合、疑ってみてもいいかもしれません。診断は、血清の間接蛍光抗体法などで行われます。診断がつけば、テトラサイクリン系の抗菌薬に良く反応するようです。

#### 「狂犬病」

狂犬病ウイルス(ラブドウィルス科リッサウィルス属)が原因する感染症で、我々獣医師が一番危惧している感染症です。

基本的な事ですが、狂犬病は人を含めた全ての哺乳動物に伝搬し、ひとたび発症すると、ほぼ 100 % 死亡するもっとも危険な「人と動物の共通感染症」の一つです。世界的には、毎年多数の発生報告があり、なかでもアジア近隣各国では増加傾向にあります。日本は、法律による予防注射の徹底や放浪犬の確保などにより、1957 年の猫の発症を最後に現在まで発症例はありません。そのため、狂犬病の恐怖に対する認識が低くなっているのが現

状の日本です。事実、私自身、狂犬病を見たことはありません。ただし、海外協力隊でアジア各国に出向き狂犬病予防注射を行っている獣医師の話は伝わってきます。やはり、恐ろしいものです。

前述しましたように、狂犬病は全ての哺乳動物に感染します。ですから、「犬だけに予防注射を行うことで、人への感染は守れるのか」という声も聞こえてきます。世界における狂犬病ウィルスの媒介動物は、先進国では野生動物(コウモリ、タヌキ、キツネ、アライグマ、スカンクなど)で、発展途上国ではイヌです。そして、人の狂犬病の99%は犬からの感染で発症しています。先進国では経口ワクチンが入った餌をへりて森へまいて投与させています。一方、発展途上国ではイヌへのワクチン接種が重要なのですが、経済、社会習慣、宗教などにより十分に実施されていないのが現状で、これが、狂犬病を減少させることのできない大きな原因になっています。

このように、人への狂犬病感染は99%がイヌからですから、いかにイヌへの予防注射が重要かと言うことです。現在、日本での犬への狂犬病ワクチン接種率(登録数に対する注射頭数)は約75%です。ただ、この数値は登録数を母数としています。実際の飼育頭数はペットフード工業会の調べでは、推定1,245万頭になっています。この数値を母数とすると40%の接種率になってしまいます。全てのイヌの70%以上がワクチン接種を行っていないと、予防効果はないと言われていいますので、今の日本がいかに怖い状況なのか、お分かりになると思います。

現在の日本で狂犬病の恐怖を知っているのは、獣医師だけなのかもしれません。予防注射はもう必要ないと言っている政治家や役人がいるようですが、とんでもないことです。これは、国家防疫なのです。また、飼い主の方の認識も低くなっているのも事実ですし、法律で決められていることを知らない方も見えます。ペットショップは、今まで犬を売るだけでしたが、平成19年6月からは法改正により犬を売る場合に正しい飼育方法や狂犬病予防法の説明が義務づけられます。動物病院に来院したこともない飼主の方のイヌでの未接種が多いのです。皆さんの意識レベルを高くして、予防率を70%以上に維持できるようにしたいですね。

#### 「エキノコックス症」

エキノコックスという条虫(寄生虫の1種です)の感染症で、人が感染すると肝臓に寄生し、重度な肝機能不全を引き起こします。この感染源はほとんどが北海道のキタキツネの糞ですので、名古屋周辺ではまず心配ありません。と言いたいところですが、北海道だけに限定されていたこの病気が東北地方の犬の糞便中で検出されたという報告がでました。本土にも蔓延し始めたと言うことです。

この寄生虫の終宿主は、キツネ、イヌ、タヌキ、ネコなどで、この糞便中に虫卵が排出されます。その虫卵が粉塵、飲水、食物などとともに中間宿主(野ネズミ、ブタ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ウシなどの家畜哺乳類やヒトを含む霊長類)が飲み込むと、虫卵は小腸で孵化して、多包虫という幼虫になります。そして、終宿主が多包虫を含む中間宿主の臓器を摂取すると、小腸内で成熟成虫となり虫卵の放出を始めるのです。

ヒトへの感染は、虫卵に汚染された飲水や食物を摂取したり、成虫が感染している犬との接触によって虫卵が経口摂取されることによります。ですから、東北地方の犬の糞便虫

に検出されたということは驚異なのです。虫卵から放出された六鉤幼虫が腸壁に侵入し、血流もしくはリンパ流によって諸臓器(肝、肺、脳など)に運ばれ包虫を形成します。多包条虫は小嚢胞が多数集合した蜂巢状構造を形成し、臓器に障害を及ぼすのです。治療法はありますが、時機を逸すると死につながる怖い感染症です。今後は本土においても要注意な感染症となるかもしれません。